

電話会議開催日：2024年11月12日

2025年3月期（2024年度）第2四半期連結決算 電話会議 内容説明スクリプト

I. 全般概況

本日発表いたしました、当社 2025 年 3 月期第 2 四半期連結決算の概要についてご説明します。なお、事業環境等につきましては、決算短信に記載しておりますので、のちほどご参照ください。

1. 2025年3月期（2024年度）第2四半期 連結決算 業績概要

はじめに、2024 年度第 2 四半期の連結決算の概況をご説明します。決算補足説明資料の 2 ページをご覧ください。

まず、2024 年度第 2 四半期累計期間の金属価格および為替レートについて説明します。

3 月決算会社に適用される 4-9 月平均の銅、金の価格は前年同期に対して上昇し、ニッケル、コバルトの価格は下落し、為替は円安になりました。

一方、12 月決算会社に適用される 1-6 月平均の銅価格は前年同期を上回り、為替は円安になりました。

連結売上高は、前年同期間に比べ 830 億円増加し、8,001 億円となりました。

連結税引前利益は、前年同期間に比べ 192 億円増加し、730 億円となりました。

2 ページのグラフでお示しているとおり、ニッケル・コバルト価格の下落や海外銅鉱山でのコスト単価差の悪化があったものの、銅価格と金価格の上昇や円安の進行、またそれに伴う在庫評価影響などが増益の主な要因です。

2. 2024 年度 連結業績予想

続いて、今回見直しました当年度の連結業績予想の概況をご説明します。決算補足説明資料の 3 ページをご覧ください。

連結税引前利益は、③11 月予想は④8 月予想に対して 150 億円の減益となる 960 億円と予想しています。その主な増減要因は 3 ページ下段のグラフでお示しているとおり、銅価格、金価格の上昇を想定しているものの、ニッケル・コバルト価格の下落と為替の円高、またそれに伴う在庫評価影響や、製錬のニッケル系でのコスト単価差の悪化を想定していることなどが減益の主な要因です。

なお、前回業績予想で「大型プロジェクト効果」としてお示した、現在ランプアップ中のケブラダ・ブランカ銅鉱山（チリ）とコテ金鉱山（カナダ）の損益についても、今回、足元の状況をふまえて見直しを行いました。前回から変更はありません。

また、8 月予想でもご説明した今年度中に発現する可能性がある減益要因「リスク要因」については、今回改めて点検して見直しを行い、その増加額、つまり減益額が「その他」に含まれています。

3. 2024 年度 実力損益

3 ページの下に掲載したグラフの右端に、2024 年度の「実力損益」の予想を掲載しています。これは、2024 年度 11 月業績予想から、金属価格や為替の変動局面において発生する一時的な要因と、その他の特殊要因を除いたものです。

今回の業績予想における実力損益は「1,200～1,100 億円」で、前回予想と同水準です。

銅価格や金価格の上昇が好転要因ですが、一方で、ニッケル価格やコバルト価格の下落や為替の円高、コスト単価差の悪化要因があり、前回と同水準の実力損益となりました。

金属価格の変動はやむを得ない部分ではありますが、数量差やコスト単価差など、「ものづくり」の部分で実力損益の悪化要因になっている点は、当社として引き続き手を打っていかねばならない部分です。

当社の事業特性上、前提となる金属価格や為替の変動に応じた実力損益の変動は避けられないものですが、それぞれの前提条件のもとで利益を最大化するべく、今後も引き続き、安定操業の維持、生産効率の向上、および成長戦略の推進に取り組んでまいります。

4. 配当

配当についてご説明します。

当社は、2021 年中期経営計画において、連結自己資本比率 50%超を維持することを財務戦略の基本とし、配当方針として「剰余金の配当は、原則連結配当性向 35%以上とし、下限指標は DOE1.5%とする」を掲げています。

今回見直しを行った連結業績予想に基づき、2024 年度の年間配当予想の見直しを行いました。その結果、今回は連結配当性向 35%よりも DOE1.5%の方が大きくなることから、DOE1.5%で計算した 1 株当たり 99 円を年間配当予想額とし、当期の中間配当額はその半分の、1 株当たり 49 円といたします。

この配当予想額は、最新の業績予想をふまえて、当社の配当方針に則って計算し直したのですが、結果として 5 月公表からの修正はございません。

II. 売上総利益、セグメント利益の内訳他の詳細

ここからは、決算補足説明資料について、ポイントとなる部分のみご説明いたします。

1. 2024 年度第 2 四半期累計決算 vs 2023 年度第 2 四半期累計決算

まず 2024 年度第 2 四半期累計決算と 2023 年度第 2 四半期累計決算の比較について説明します。

1) 4 ページ セグメント別決算実績 売上総利益増減

それでは、4 ページ 2024 年度第 2 四半期累計実績 vs 2023 年度第 2 四半期累計実績のページ左上「売上総利益」のボックスをご覧ください。

まず資源セグメントの売上総利益について説明します。

【資源セグメントの売上総利益】 290 億円（54 億円の減益）となりました。

ページ中段の「売上総利益増減説明 ※コテ金鉱山を除く」に記載のとおり、海外銅鉱山が大きな減益となりました。

① 菱刈鉱山

a) 好転要因：金価格の上昇により価格差が、円安により為替差が好転しました。

b) 悪化要因：

・数量差：採掘順の影響で、減産、減販（販売金量は前年同期比-0.4t）

なお、菱刈鉱山の 2024 年度の販売金量の計画は 4.0t/年から変更はありません。

② 海外銅鉱山（おもにモレンシー銅鉱山）

a) 好転要因：12 月決算会社に適用される 1-6 月の銅価格の上昇により価格差が、円安により為替差が好転しました。

b) 悪化要因：

・数量差：人員不足による採掘量の減少や品位の低下などが続いています。

・コスト単価差：減産、減販に加え、人件費や外注費、修繕費等が増加しました。

次に製錬セグメントについて説明します。

【製錬セグメントの売上総利益】 417 億円（11 億円の減益）となりました。

下段にお示した製錬の売上総利益の増減説明のとおり、銅系は増益となりましたが、ニッケル系は減益となりました。

①銅系

a) 好転要因：円安の進行と金属価格の上昇により在庫評価が好転しました。

b) 悪化要因：

- ・コスト単価差：エネルギーコストの上昇
- ・その他：副産品の硫酸価格の下落や、昨年発生した一時的な増益要因の剥落

②ニッケル系

a) 好転要因：

- ・その他：円安の進行による加工収入の好転や、昨年発生した一時的な減益要因の剥落

b) 悪化要因

- ・条件差：ニッケル価格、コバルト価格の下落。
→ニッケル系は、加工収入が金属価格に連動する「シェアリング」という制度が適用されるため、金属価格の変動が業績に大きな影響を与えます。

2) 5 ページ 材料事業の製品群別売上高

5 ページ上段、材料事業の製品群別売上高です。電池材料については、堅調な需要が続きましたが、金属価格が下がったため、減収となりました。

機能性材料については、製品によって濃淡はあるものの、長引いていた電子部品向け部材の在庫調整が進み、需要が回復したことで、増収となりました。

3) 5 ページ 持分法投資損益（5 ページ中段に記載）

①セロ・ベルデ、カンデラリア

概況：いずれも増益。給鉱品位が低下し、減産、減販となりましたが、12 月決算会社に適用される 1-6 月の銅価格上昇と円安進行により価格差と為替差が好転しました。

②エヌ・イーケムキャット/日本ケッチェン/エム・エスジंक/その他

大幅に悪化していますが、主に、その他の中に含まれるケブラダ・ブランカ銅鉱山の生産開始に伴い、前年同期には発生していなかったランプアップ等各種費用や、操業にかかる損益の PL 計上によるものです。

2. 2024年度年間予想 11月 vs 8月

続いて、2024年度予想の前回予想（8月）と今回見直した予想（11月）の比較について説明します。前提となる金属価格の年間平均は、8月予想と比べ、銅と金は価格上昇を、ニッケルとコバルトは価格下落を、為替は円高を想定しています。

1) 6ページ 対8月予想比較 セグメント別

それでは、6ページ 2024年度 11月予想 vs 8月予想のページ左上「売上総利益」のボックスをご覧ください。資源セグメントは同水準、製錬、材料の各セグメントで減益を想定しています。

なお、冒頭にご説明した今年度中に発現する可能性がある減益要因の「リスク要因」数十億円は、「調整額」の売上総利益の段階で計上していますので、ご注意ください。

それでは、まず資源セグメントの売上総利益について説明します。

【資源セグメントの売上総利益】 680億円（8月予想と同水準）を想定しています。

なお、資源セグメントの売上総利益には、当社の連結対象で現在ランプアップ中のコテ金鉱山の売上総利益も含まれています。計画通りにランプアップを進めており、同鉱山の売上総利益の水準は、前回8月予想から大きく変わっていません。また、2024年後半に利益貢献をする想定も変わっていません。

では、ページ中段、「売上総利益 ※コテ金鉱山を除く」の増減説明をご覧ください。

①菱刈鉱山

a) 好転要因：金価格の上昇による価格差の好転を想定しています。

②海外銅鉱山（主にモレンシー銅鉱山）

a) 悪化要因：

・コスト単価差：モレンシー銅鉱山の修繕費用や外注費用の増加等を想定しています。

【製錬セグメントの売上総利益】 370億円（300億円の減益）を想定しています。

①銅系

a) 悪化要因：

・在庫評価：金価格の上昇はあるものの、為替の円高進行による悪化を想定しています。

②ニッケル系

a) 悪化要因：

・価格条件差：ニッケル、コバルト価格の下落を想定しています。

・コスト単価差：ニッケル、フェロニッケルともに減産による悪化を想定しています。

・在庫評価：ニッケル、コバルト価格の下落、円高の進行による悪化を想定しています。

2) 7ページ 材料事業の製品群別売上高

7ページ上段、材料事業の製品群別売上高です。

電池材料事業については、堅調な需要が続くと想定しており、また、2024年度第4四半期からは新工場での生産開始を目指して立ち上げを進めています。

機能性材料事業では、概ね8月予想の水準で推移しています。引き続き、電子部品市場の回復は濃淡があり、一部製品群では再び在庫調整に入るなど、その回復は緩やかなものと想定しています。

3) 7 ページ 持分法投資損益

①セロ・ベルデ、カンデラリア

計画通りの操業を想定しており、銅価格の上昇による好転を想定しています。なお、カンデラリア銅鉱山は、計画通り、下期に高品位部の採掘を行う見込みです。

②その他

ケブラダ・ブランカ銅鉱山の生産数量は前回予想通りですが、立ち上げにかかる各種コストの増加を想定しています。

以上